

演題15

心身障害児通園施設のう蝕罹患状態と 母親の意識調査

○岩男好恵・岡本直子・柏木伸一郎・*立川義博
*小島哲一郎
(福岡市・小児歯科柏木医院)* (九大・歯・小児歯)

演者らは、福岡市内の心身障害児通園施設の検診を、年1回行ってきた。障害児においては、健常児に比べプラークおよびダイエツコントロール等の歯科的管理を行うことが非常に困難である。そのため、重症のう蝕に罹患している者が、しばしば見られた。しかし、検診結果を見てみると、う蝕罹患状態は年々向上してきている。また、同様に検診を行っている一般幼稚園と比較してみても、通園施設の方が、う蝕が少ない傾向が認められた。

そこで今回、心身障害児通園施設と一般幼稚園の経年的う蝕罹患状態の比較ならびに、母親の意識調査を行った。これにより、通園施設の現状を把握し、これからの歯科的管理に役立てたいと考えている。

調査対象は、福岡市内の心身障害児通園施設3ヶ所と一般幼稚園2ヶ所である。これらの園の経年的検診カルテを用い、う蝕罹患状態を比較した。

また、通園施設89名、一般幼稚園240名の園児の母親にアンケート調査を実施した。アンケート内容は、離乳・歯みがき・おやつおよび母親の歯科に対する関心度などである。

これらの結果を比較検討したところ、若干の知見を得たので報告する。

演題16

象牙質の形成異常を疑わせる1症例

○一木敷由・久芳陽一・本川 渉・吉田 稜
(福歯大・小児歯)

今回我々は、本学付属病院小児歯科外来を訪れた象牙質形成不全症を疑われる1症例を経験した。患児は3歳6カ月の女兒で、昭和62年3月19日、齲蝕処置を希望して来院。口腔内はD_Eは既に開業医で処置を受け、Eにクラウン、Dは根管治療中であつた。又、全歯牙に齲蝕や咬耗が認められ、パノラマX線写真では永久歯歯胚の形成遅延が認められた。手根骨の化骨状態は年齢より著しく高く、9歳前後と同様であつた。

問診によると、父親の乳歯は萌出が著しく遅延していた。又、I₅の埋状が認められたため昭和51年本学付属病院口腔外科外来で抜歯を行ったそうである。

母親が妊娠4カ月頃胃下垂のため投薬を受けているが、出産は正常分娩で、生下時の体重は3,050gであつた。